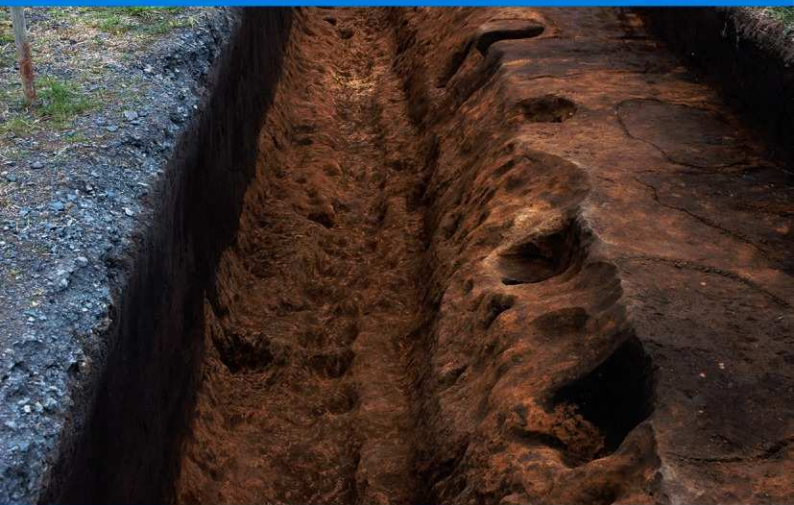


台渡里官衙遺跡群（台渡里廃寺跡・台渡里官衙遺跡）

台 渡 里 2 1

—市道常磐21号線狭あい道路整備及び公共下水道工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第179次）—



2 0 1 9

水戸市教育委員会

台渡里官衙遺跡群（台渡里廃寺跡・台渡里官衙遺跡）

台 渡 里 2 1

—市道常磐21号線狭あい道路整備及び公共下水道工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第179次）—

2019

水戸市教育委員会

ごあいさつ

台渡里官衙遺跡群は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置する古代常陸国那賀郡の官衙跡・寺院跡です。県内でも最古級の寺院跡を含む広大な古代遺跡として県外からも多くの注目を集め、現在、その一部は国の史跡として指定され、恒久的な保存と継続的な活用に向けて検討を進めているところでございます。

台渡里官衙遺跡群の周辺には国史跡「愛宕山古墳」をはじめ、堀遺跡、西原古墳群、渡里町遺跡など数多くの古代遺跡が立地しており、古くから政治・宗教・文化の中心地であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである文化財は、一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、現代を生きる私たちが大切に保存しながら、後世へと伝えていかなければならない貴重な国民の共有財産ですが、都市化の様相が強まる中で、特に埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。本市においては、市民の生活安全・衛生とのバランスを考慮しつつ、文化財の意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護・保存に努めているところです。

このたび、台渡里官衙遺跡群を構成する「台渡里廃寺跡」及び「台渡里官衙遺跡」の一角において、狭あい道路工事で公共下水道工事が計画され、発掘調査を実施したところ、奈良時代前後に営まれた竪穴建物跡や溝跡などの遺構が検出されるとともに、東北地方との関わりを示す土器が出土するなど、奈良・平安時代に機能した那賀郡衙に関連する遺構・遺物の広がりを捉えることができました。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端を復元するうえでかけがえのない貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の発掘調査の実施にあたり、多大なる御理解と御協力をいただきました事業者様、近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝を申し上げ、ごあいさついたします。

令和元年9月

水戸市教育委員会

教育長 本 多 清 峰

例 言

- 1 本書は、水戸市波里町地区において市道常磐21号線狭あい道路整備及び公共下水道工事に伴う、台波里官街遺跡群第179次の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、水戸市より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が水戸市教育委員会の指導のもとに行った。
- 3 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記のとおりである。

所在地	茨城県水戸市波里町2882-2番地先～2873-1番地先					
調査面積	180㎡					
調査期間	平成31(2019)年3月1日～令和元(2019)年5月14日					
調査担当者	斎藤 洋(株式会社地域文化財研究所)					
調査員	高野浩之(株式会社地域文化財研究所)					
調査参加者	大貫浩一	大山年明	岡部五男生	小野健治	角谷秀夫	北村 昶
	鈴木潤一	高安丈夫	高安幸且	萩野谷幸治	安井忠一	
整理参加者	川村理華	木村春代	増田香理	野村浩史	小林真千子	
- 4 整理調査及び本書の作成は株式会社地域文化財研究所において斎藤、高野が担当した。
- 5 本書は、米川暢敬(水戸市教育委員会歴史文化財課)と斎藤、高野(株式会社地域文化財研究所)が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて高野が編集した。文責は文末に記載してある。
- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管・管理している。
- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・方々より御教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表すものである(敬称略・順不同)。

茨城県教育庁総務企画部文化課	水戸市	水戸市教育委員会	株式会社杉森工業
----------------	-----	----------	----------

渥美賢吾

凡 例

- 1 挿図中で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
台渡里庵寺跡・台渡里官衙遺跡群第 179 次 DWT179
S I : 堅穴建物跡 S K : 土坑 Pit : ビット S D : 溝跡 S X : 不整形遺構
K : 植栽痕・攪乱等
- 2 測量は世界測地系を用い、挿図中の方位は座標北を示す。
- 3 土層図及び断面図に記した数値は標高を示す。
- 4 遺構の形態・規模は基本的に現存している状態で判断した。計測は壁上端で行い、深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置までを計測した。
- 5 遺構の土層及び遺物の色調表現は、『新版標準土色帖 2003 年版』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）に準拠した。粒状規模は mm 単位で表し、含有量は 2% 以下を「微量」、3~10% を「少量」、11~20% を「中量」、21% 以上を「多量」とし、多量のものについては（ ）付で含有量を示した。いずれも同書の「面積割合」を参照している。
- 6 挿図中、遺構平面図及び断面図の縮尺は基本的に 1/60、1/80 とし、出土遺物の縮尺は 1/3、1/4 を用いて各図にスケールで示した。
- 7 遺物観察表の標記は、() 内を復元値、〈 〉内を残存値として表す。遺物の計測値は規模を「cm」、重量を「g」で表した。
- 8 出土遺物集計表の中で、接合したものは全体で 1 点とし、同一個体が明らかであっても接合しないものはそれぞれを 1 点とした。
- 9 挿図中で使用したスクリーン・トーン及び線種・ドット類は以下凡例図のとおりである。

凡例図



※これ以外の表記は挿図中に記載した。

- 10 本文中で使用した地図類の出典は、各図に明記した。
- 11 引用・参考文献は本文中の最後に一括して掲載した。
- 12 表紙に使用した写真は 3 区の SD01 近景である。

目次

本文目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過

1	調査に至る経緯	1
2	調査の方法と経過	1
	(1) 調査の方法	1
	(2) 調査の経過	3

第2章 遺跡の位置と環境

1	地理的環境	4
2	歴史的環境	4
3	台渡里官衙遺跡群における既往の調査	5

第3章 調査の成果

1	台渡里第179次調査の概要	9
2	基本堆積土層	9
3	検出された遺構と遺物	11
	(1) 竪穴建物跡	11
	(2) 土坑	13
	(3) ビット	15
	(4) 溝跡	15
	(5) 井戸跡	19
	(6) 不整形遺構	20
	(7) 遺構外出土遺物	21

第4章 総括

1	土地利用の変遷	26
2	東北地方との関わり	27

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	2	第13図	SD01 (1)	16
第2図	調査区配置図	3	第14図	SD01 (2)	17
第3図	周辺の旧地形図	4	第15図	SD01 出土遺物	18
第4図	遺跡の位置と周辺の遺跡図	6	第16図	SD02	19
第5図	台渡里官衙遺跡群 における調査地点	8	第17図	SE01	19
第6図	基本堆積土層図	9	第18図	SE01 出土遺物	20
第7図	遺構全体図	10	第19図	SX01	21
第8図	SI01	12	第20図	遺構外出土遺物 (1)	21
第9図	SI01 出土遺物	13	第21図	遺構外出土遺物 (2)	22
第10図	SK01	13	第22図	台渡里官衙遺跡群第179次調査 周辺における遺構の分布状況	27
第11図	SK02・出土遺物	14	第23図	台渡里官衙遺跡宿屋敷地区から 出土した東北系土器	28
第12図	ビット	14			

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	7	第5表	出土遺物観察表 (石器)	24
第2表	ビット計測表	15	第6表	出土遺物観察表 (鉄製品)	25
第3表	出土遺物観察表 (土器)	23	第7表	出土遺物集計表	25
第4表	出土遺物観察表 (瓦)	24			

写真図版目次

図版1	1区全景/SD02全景/SD02土層断面/2・9・10区全景/SX01全景/SX01土層断面
図版2	3・6・7・8区遺構確認状況/3・6・7・8区全景/SI01全景/SI01遺物出土状況/ SI01主柱穴及びカマド付近土層断面/SI01西壁際貯蔵穴状掘り込み
図版3	SD01(5区)全景/SD01(3区)全景/SD01(3区)近景/ SD01(3区)土層断面(B~B')/SD01(3区)土層断面(C~C')
図版4	4区全景/5区全景/SD01(5区)全景/SD01(5区)近景
図版5	SD01(5区)土層断面/SE01全景及び土層断面/5区東側土層断面/5区西側土層断面 8区確認状況/9区確認状況/10区確認状況
図版6	SI01, SK02, SD01出土遺物
図版7	SD01, SE01, 遺構外出土遺物 (1)
図版8	遺構外出土遺物 (2)

第1章 調査に至る経緯と調査経過

1 調査に至る経緯

平成30年4月18日付及び平成30年4月27日付けで水戸市長 高橋 靖（生活道路整備課・下水道整備課長、以下事業者という）より、水戸市道常磐21号線及び22号線の狭い道路整備及び公共下水道工事に係る埋蔵文化財発掘の通知が提出された。

市道常磐21号線の周辺では、南側に面する国史跡「台渡里官衙遺跡群 台渡里廃寺跡」の指定地内で実施した確認調査（台渡里第17次）の際に台渡里廃寺跡南方地区の東側寺院地区画溝が確認されており、北側に面するサンユーストアー渡里店の建設に際し実施した確認調査（台渡里第26次）においても、台渡里廃寺跡南方地区の東側寺院地区画溝のほか、7世紀後葉～8世紀前葉にかけて営まれたと考えられる堅穴建物跡群や掘建柱建物跡群などが検出されていることから、同路線上においても遺構・遺物の広がりには十分に予想された。

上述のような周辺における埋蔵文化財の確認状況と国史跡に係る重要遺構の存在が予測される中で、事業者と計画変更及びその保存について協議を重ねたところ、常磐21号線の南側に隣接する国史跡指定地については、遺構を保護できるものの、周知の埋蔵文化財包蔵地「台渡里官衙遺跡」内における工事計画の変更は困難との結論に達した。そのことから、周知の埋蔵文化財包蔵地「台渡里官衙遺跡」内の狭い道路整備及び公共下水道については、記録保存を目的とする本発掘調査の実施、国史跡「台渡里官衙遺跡群 台渡里廃寺跡」範囲内については、文化財保護法第125条に基づく許可を得ての確認調査の実施が相当である旨の意見書を付して、県教委教育長へ通知を傳達した。

この通知に対し、県教委教育長から事業者へ、工事着手前に発掘調査及び現状変更許可申請に基づく確認調査を実施すること。調査の結果、重要な遺構が発見された場合には、その保存について別途協議を要すること等の指示・勧告があった。これを受けて、事業者は株式会社地域文化財研究所と業務委託契約を締結し、平成31年3月1日から発掘調査を実施することとした。（米川）

2 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

大きく4地点に分かれた本調査区域は、水戸市教育委員会の立ち会のもとに設定した。当該地は現状で使用されている道路域のため、調査の工程としては安全対策を最優先とした。さらに、近隣住民の生活に支障のないよう配慮した結果、1区、4・5区、3・6・7・8区、2・9・10区の順番で進める事とした。なお、今回設定した区域内（8・9・10区）には、国史跡の指定地が含まれており、こちらについては一切の掘削をせず、平面的な遺構の確認調査のみを併せて行っている。本調査に伴う表土除去には重機を用い、遺構確認面までを慎重に掘削した。その後、人力による精査を経て、本調査対象となる各遺構を確定し発掘調査を進めた。遺構測量については、「世界測地系平面直角座標第Ⅸ系」に準じた10m×10m方眼を各調査区に重ね、東西方向には西端を起点とした算用数字を、南北方向には北端を基点としたアルファベットを付してグリッドを設定し調査の基準とした。調査区周辺には標高34.7mの水準点も2ヵ所に設置している。遺構の実測については1/20縮尺を基準としながら、実測の対象物に合わせた縮尺を選択し、堆積する土層や遺構の重複関係に留意しながら平面図、断面図の記録にあたった。写真撮影には主要機にデジタル一眼レフカメラ（1,000万画素



第1図 調査区位置図 (1/2,500)

※水戸市都市計画区域図に加筆修正

以上)を使用し、必要に応じて6×7mm判カラーリバーサルフィルムも併用している。

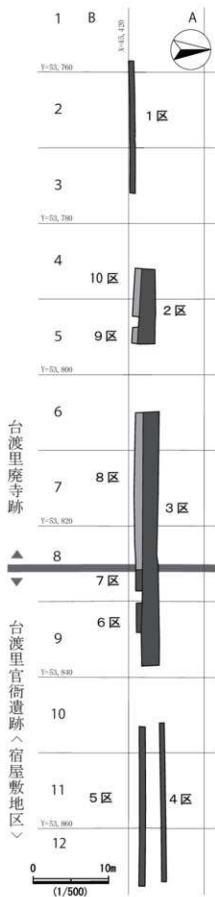
出土遺物の注記・実測・トレースは全て手作業で行い、遺物は全て1/1縮尺で実測した。割付・編集作業はDTP編集ソフトを用いた。

(2) 調査の経過

平成31年3月1日(金)、発掘調査を開始した。3月12日(火)、1区の表土除去に着手した。本区においてSD02が検出された。3月15日(金)、1区の発掘調査を終了し、教育委員会による終了確認を受けた。その後1区の埋め戻しを実施し、新たに4・5区の表土除去作業に着手した。5区からはSD01とSE01が検出された。3月18日(月)、4区の調査は終了。併行する5区の調査は継続。3月20日(水)、5区の調査を終了し、教育委員会による終了確認を受けた。その後、4・5区の埋め戻しを実施した。3月26日(火)、3・6～8区の表土除去に着手した。3区では5区と接続するとみられるSD01が検出された。3月28日(木)、3・6・7区の遺構調査を開始した。4月1日(月)、史跡指定地となる8区の平面実測と写真撮影を行った。4月11日(木)、3・6・7区で新たに検出されたSI01の調査に着手した。4月16日(火)、3・6～8区の調査を終了し、教育委員会による終了確認を受けた。その後、同区の埋め戻し作業を実施した。4月17日(水)、2・9・10区の表土除去に着手した。4月26日(金)、同区の発掘調査を終了し、教育委員会による終了確認を受けた。その後同区の埋め戻し作業を実施した。5月7日(火)、現場撤収に向けた借地の原状復旧作業を実施した。5月13日(月)、2・3・6～10区の舗装工事を開始し、併せて発掘用機材の撤収を行った。5月14日(火)、同区の舗装工事が完了し、教育委員会及び関係者へ調査区と借地等の原状回復を報告した。併せて発掘調査終了に伴う事務手続きを終え、現場における発掘調査の全工程を完了した。

整理調査は、発掘調査終了後速やかに出土遺物の水洗い作業に入った。注記作業、接合を経て遺物の実測を行った。遺構図作成と遺物のトレースを同時に進行させ、遺構及び遺物の原稿はこれらの作業と併行して執筆した。編集作業を経て入稿し、報告書の刊行に至った。

(斎藤)



第2図 調査区配置図

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

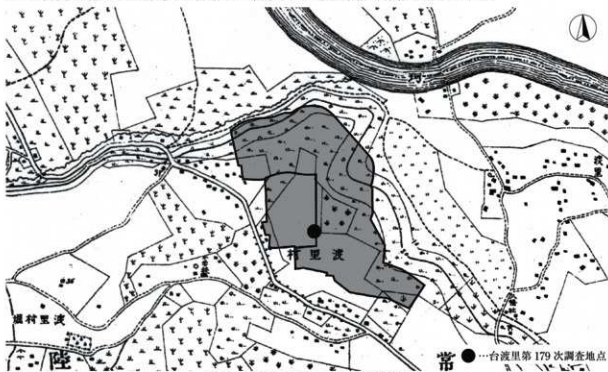
台渡里官衙遺跡群が所在する渡里地区は、関東平野の北東部に位置する水戸市の北部にあって、栃木県的那須岳山麓を水源とする那珂川を眼下に望んだ台地上に立地する。水戸市域を南東流する那珂川は、既に入流域に入っており、沿岸には沖積低地が広がって流路も大きく蛇行してくる。特に渡里地区が面した部分では顕著で、方向を南流から東流へと大きく転換している場所となっている。周辺の地名には「舟渡」などの地名が認められ、「渡里」と合わせて渡河に関連する名称から、水運などの交通の要衝に適した場所であった可能性が想定されるところである。一方で、低地から那珂川に面した台地縁辺部では急傾斜地が発達し、低地との比高差は20m程を測る。近辺には古くから湧水点が生じていることが知られるなど、住環境に適した土地であったこともうかがわれ、このような好条件のもとに、那賀郡の中心地となる台渡里官衙遺跡群が展開したと考えられる。

2 歴史的環境

本遺跡群の所在する渡里地区及び堀地区周辺には、旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が多数確認され、各時代の痕跡を容易にうかがうことができる。

旧石器時代では、アラヤ遺跡(201-024)及びその周辺で硬質頁岩製、ガラス質黒色安山岩製の尖頭器が採集されており、古人類による土地利用は旧石器時代まで遡ることが示唆される。

縄文時代の遺構・遺物は、台地上の河岸段丘縁辺部に認められることが多い。本次調査地点の東に立地する渡里町遺跡(201-121)では、第1・6両地点の調査において中期の阿玉台式期から加曾利EⅢ式期を主体とした土坑群が密集して確認され、環状集落の様相を呈している。



第3図 周辺の旧地形図(1/20,000)

明治25年出版・大日本帝国陸地測量部「水戸上市」を使用、加筆修正

弥生時代については遺構の調査事例がほとんどなく、主に土器の表面採集のみに留まっているのが現状である。しかし、堀遺跡(201-064)第2地点の古墳時代前期初頭とされた第三七号住居跡では、土師器壺とともに十玉台式期の範疇に入るとみられる後期終末の壺が伴見し、古墳時代への過渡期を考える上で注目されよう。

古墳時代になって、那珂川に面した緑辺部を中心に造墓活動が活発になる。前方後方墳を持つ西原古墳群(201-080)では、5～7号墳の調査において横穴式石室が検出されている。また、中期には那珂川流域で最大級の規模を誇る国史跡・愛宕山古墳(201-079)が築造され、該期における有力者の存在が垣間見られる。

奈良・平安時代の渡里地区は、今回の調査地となった台渡里官衙遺跡(201-276)、台渡里廃寺跡(201-098)が100次以上にわたる調査によって政治の中心地として機能していたことが明らかになっている。これらの成果については次項で述べることにし、ここでは隣接する遺跡を概観したい。台渡里廃寺跡、台渡里官衙遺跡の西側には堀遺跡(201-064)、東側には渡里町遺跡(201-121)が台渡里遺跡群を挟む形で存在し、両遺跡は官衙関連集落と理解されている。堀遺跡の第2地点では8世紀後半～9世紀代を主体とした竪穴建物跡と掘立柱建物跡が展開し、桁行が8間以上を有する長舎風で公的な施設を連想させる掘立柱建物跡や、刀子等多様な鉄製品、須恵器壺Gや人面墨書土器など特殊な土器が出土するなど、郡衙や郡衙周辺寺院に関係性の強い様相が認められる。第4地点では「地中梁」(「柱筋溝状遺構」)の可能性のある総柱建物跡と帯金具の蛇尾が出土し、第9地点では大型の東西棟建物群、第18地点では第1地点の長舎風掘立柱建物跡と柱筋を描る柱穴列が確認されている。また、第6地点では古代村落内の仏堂とみられる廂・孫廂を持つ掘立柱建物跡が確認されており、これらが集落の外縁部に位置しているとするならば、計画的に集落が形成された可能性が指摘される。一方、渡里町遺跡の第1地点では、文字銘記ではない飛雲文の絵画的な描写が施された墨書土器が出土している。飛雲文は仏教建築や寺院堂塔の屋根に葺かれる軒平瓦の瓦当文様に多く見られることから、台渡里廃寺跡との関連性が注視される。

中世になると、春秋氏の居城として知られる長者山城跡(201-100)が築かれる。土塁・堀が現存し、外側では15世紀後半～16世紀初頭の土器群を伴った地下式坑や井戸跡が確認されている。アラヤ遺跡(201-024)第2地点では、長者山城跡に関係するとみられる瓦礫道が確認されている。渡里町遺跡(201-121)第8地点の調査では、勝幢寺付近で中世の遺物を伴った方形竪穴状遺構や地下式坑が調査されている。堀遺跡(201-064)第4地点においても15～16世紀を主体とした多数の地下式坑、方形竪穴状遺構や井戸跡が検出され、県下でも出土例が少ない石罫が出土するなど、城跡を中心に生活域の広がりがうかがわれる。

3 台渡里官衙遺跡群における既往の調査

台渡里廃寺跡(201-098)、台渡里官衙遺跡(201-276)、アラヤ遺跡(201-024)の3遺跡は包括的に台渡里官衙遺跡群と呼称され、台渡里廃寺跡及び台渡里官衙遺跡の一部が国史跡に指定されている。調査数は本次を含め179次に上るため、ここでは注目される調査を抽出しておきたい。

台渡里廃寺跡において調査の先鞭が切られたのは、高井佛三郎氏の学術調査が最初である。3次にわたる調査により、観音堂山地区では建物跡が、南方地区では塔跡が確認され、出土した瓦の中に「徳輪寺」といった文字瓦や瓦塔片などが含まれていることが報告された。これら高井氏による調査成果の後、観音堂山地区については那賀郡那賀郡院や河内駅家などの見解も見られたが、第16～19次調

査で陶製相輪の一部や塑像片、須恵器高環形香炉などの仏教関連遺物が多数出土したことから、7世紀後半頃の都衙周辺寺院ということが明らかにされ、観音堂山伽藍が9世紀代に焼失していることも明らかとなった。一方、南方地区にも塔跡の基壇が存在するが、出土した内面黒色処理の土師器環により9世紀後半に造営されたことが判明した。南方地区では伽藍を区画する溝が途絶しているため、観音堂山地区伽藍焼失後、南方地区で再建が開始されたが、何らかの理由で再建が中断されたと考えられている。



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡図 (1/25,000)

※国土地理院発行2万5千分の1地形図「水戸」「石塚」を使用、加筆修正

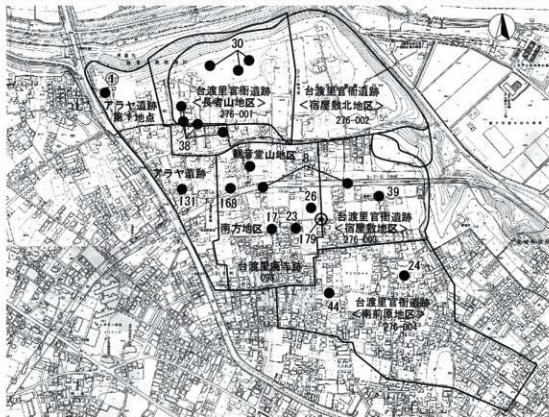
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
022	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石斧・石錘・土偶、弥生土器(後)、土師器・須恵器(古)	
023	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石斧・石剣・土偶、弥生土器(後)、土師器(古前)、須恵器(奈・平)	
024	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器(先)、縄文土器(早～晩)、石斧・石剣・土偶、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
025	上杉遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)	
026	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
029	安戸星遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
038	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
039	国田権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
040	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)、石錘・土偶、弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
047	田谷富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
048	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)	
063	丹波里遺跡	集落跡	土師器・須恵器(古・奈・平)	
064	堀遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古前・奈・平)、須恵器・灰輪陶器・粘輪車・砥石・鉄鎌・鉄鍬・刀子・釘・瓦(奈・平)、内耳土器・土師質土器・常滑焼・磁鉢・石臼(中)、瓦質土器・磁器(近)	
079	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	方円1(2)、円墳1(2)
080	西原古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・甕玉・銅環・鉄鍬(古)	方円1、円墳8(11)
081	堀町西古墳	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・甕玉・銅環・鉄鍬(古)	方円1、円墳8(11)
088	安戸星古墳	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・甕玉・銅環・鉄鍬(古)	円1(2) 方円1、円墳8(11)
089	大井古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・甕玉・銅環・鉄鍬(古)	方円1、円墳8(11)
095	権現山横穴群	横穴群	土師器・須恵器・水晶製切子玉・ガラス製小玉(古)	横穴(4)
096	富士山古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・人物埴輪(古)	方円1(円)、円8
097	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	方円1、円2(4)
098	台渡里廣寺跡	寺院跡 官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有嘴尖頭器・剥片(先)、縄文土器(前・後～晩)、石器、弥生土器(後)、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・文字瓦・瓦塔、陶製相輪・金箔製品・鉄釘・青銅製品・鉄滓・須口(奈・平)、土師質土器(中)、内耳土器(中)	
099	田谷遺跡	官衙跡	土師器・須恵器・瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城跡跡		
121	渡里町遺跡	集落跡	縄文土器(早・中・後)、土師器(古・奈・平)、須恵器・灰輪陶器(奈・平)	
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
126	塚宮古墳群	古墳群		方円(1)、円(2)。
148	山田A古墳群	古墳群		
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品・木製品・料平瓦(奈・平)	
225	白石遺跡	城跡跡 集落跡	角錐状石器(先)・削器(先)、尖頭器(草創)・有舌尖頭器(草創)・石鏃(草創)、縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器・須恵器(古・奈・平)、内耳土器(中)、陶器(中)、磁器(中)	
226	白石古墳群	古墳群		円5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器(後)、土師器(古)、陶器	
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
276	台渡里官街遺跡	集落跡	縄文土器(晩)、土師器・須恵器(古・奈・平)、鉄製刀子(古)・鉄製鎌(古)・砥石(古)、墨書土器・炭化米・瓦(奈・平)、内耳土器(中)、陶器・磁器・銅鍬・銅箸・砥石(近)	
296	水戸内遺跡	包蔵地		
311	高野下遺跡	包蔵地		

『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(平成10年度版)』に加筆

台渡里官衙遺跡群は長者山地区・宿屋敷北地区・宿屋敷地区・南前原地区に区分されている。長者山地区では、前述した台渡里廃寺跡の調査時に高井氏が既に礎石建物跡の存在を突き止めていたが、その後の調査で炭化米が出土し、那賀郡衛正倉院と推定された。第30次調査ではさらに9棟の礎石建物跡が確認され、第38次調査では二重に区画する溝を検出し、正倉院の全容が明確になった。出土遺物には人名、地名など記した文字瓦が多く、正倉院造営に関わる文字資料として注目される。宿屋敷地区でも官衙に関連する事例が多く認められる。第8次の溝に連結した柱穴列は欄列又は塀など区画施設を想定させる。併せて布掘り総柱建物跡が検出され、さらに溝からは「郡厨」と記された墨書土器が出土している。第23次調査では台渡里廃寺跡南方伽藍の東側地区画溝を確認した。第17・26次調査では観音堂山伽藍の時期に先行する竪穴建物跡、掘立柱建物跡、鍛冶工房跡が調査され、寺院造営に関わった集団の拠点と考えられている。南前原地区では、第24次で総地業礎石建物跡と区画溝が確認された。溝の上層からは多量の炭化米が出土し、併せて検出された竪穴建物跡から「備所」と記された墨書土器も出土している。その第24次に近接する第41・44次で発見された幅6m、深さ2.5mの巨大な方形区画溝は、出土土器から8世紀前葉までに埋没したとみられ、初期的な官衙施設の可能性がある。その上層からは礎石建物跡も確認され、第24次の建物群と併せて南前原地区一帯には長者山地区とは別の租税等備蓄を目的とした倉等の施設が連想されるところである。

アラヤ遺跡（201-024）は、台渡里廃寺跡の西側に隣接し東側の一部が台渡里官衙遺跡長者山地区に組み込まれている。第1地点では欄柱掘立柱建物跡や竪穴建物跡が調査された。長方形の竪穴建物跡からは刀子や砥石が少量出土していることから工房跡と考えられ、寺院・官衙の造営に携わった集落の可能性もある。第131次調査では、掘立柱建物跡と瓦が多量に埋没した区画溝2条を確認した。溝は走行方向が近接する台渡里廃寺観音堂山伽藍の主軸と類似し、関連性が示唆される。（高野）



第5図 台渡里官衙遺跡群における調査地点 (1/10,000)

※水戸市都市計画区域図2千5百分の1を加筆、修正

第3章 調査の成果

1 台渡里第179次調査の概要

今次地点は台渡里庵寺跡、台渡里官衙跡宿屋敷地区に跨がり、調査区内には国史跡指定地（8・9・10区）も含まれる。調査地点における現況の地形は、東側に向かうに従って徐々に下り勾配となる様子が看取されたが、各調査区では、近・現代に生活道路の造成や農耕などによる攪乱等が遺構確認面の直上付近にまでおよび、旧表土は大きく削平を受けていた。検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴建物跡1棟、土坑1基、ピット2基、奈良・平安時代から中世の間に構築された溝跡1条、中世の井戸跡1基、中・近世の土坑1基、ピット12基、時期不明の溝跡1条、不整形遺構が1基であった。東西方向に細長く設定された調査区の制約上、全容の把握には至らなかったものの、推定規模が8m前後の竪穴建物跡（SI01）や、3区から5区にかけて調査区内をほぼ縦断する溝跡（SD01）などは、土地利用の変遷を推察する上で有用な成果であった。

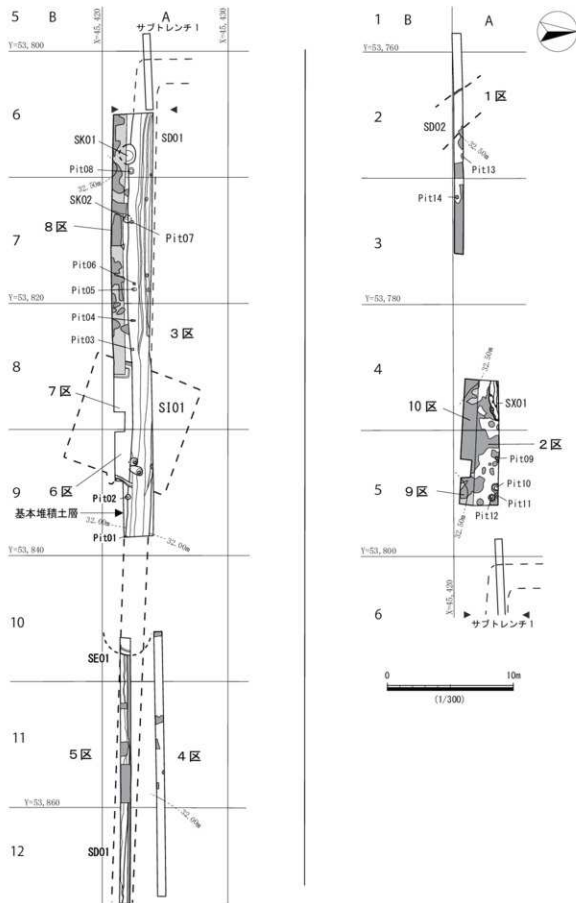
出土した遺物の総点数は、386点であった。内訳は土器類が主体で全体の83%を占め、逆に瓦の出土量は13点のみに留まり、周辺遺跡での出土量と比較して極端に少ない。遺物から見た時期別では、縄文時代中期の深鉢を最古に、同時期のもともみられる石器（磨石）も出土している。遺物の中で最も多く出土しているのは奈良・平安時代の土師器221点、須恵器94点で7世紀末～8世紀前葉段階に比定される非クロコ成形の土師器坏やかえりを有する須恵器蓋などが目立つ。井戸跡からは中世の内耳土鍋がまとまって出土しており、さらには製鉄関連遺物である鉄滓などの出土も見られた。

2 基本堆積土層

基本堆積土層の観察は、A9グリッド（3区東端の南壁側）にテストピットを設定し行った。表土層は耕作土と旧表土からなる。地点によって層厚に差があり、西側から東側にかけて徐々に厚さを増している。1層は上部を農耕により削平されたソフトローム層で、上面が今次調査区の遺構確認面である。2層は薄いハードロームへの漸移層となり硬く締まる。3層から強固に締まるハードローム層となり、4層は3層より若干暗めな色調のハードローム層で、黒色・赤色酸化粒を全体的に少量含む。5層は4層よりもやや明るめな色調のハードローム層となり、少量だが下位には赤色酸化粒と鹿沼軽石の粒子を含み粘性を持つ。6層は所謂鹿沼軽石層（Ag-KP）で、7層は基本的に6層とは同じ含有物で構成されるものの、錆色の赤褐色土（5YR4/8）と黒色酸化粒が目立ち、粘性も強く6層とは異質な印象を受ける。



第6図 基本堆積土層図



第7図 遺構全体図

3 検出された遺構と遺物

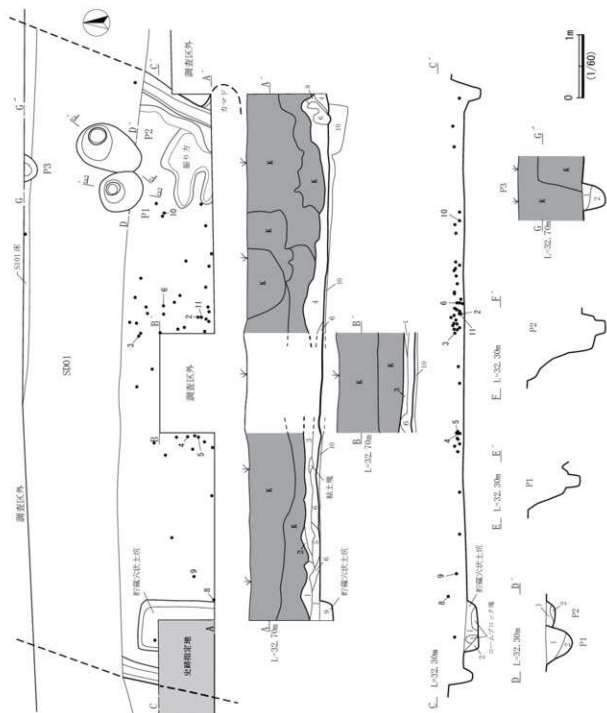
(1) 竪穴建物跡

S101 (第8・9区・写真図版2・6)

A8・9グリッドに位置し、3・6・7・8区に跨がる。遺構の南北両側が調査区外へ延び、遺構西側の一部は台渡里廃寺跡・台渡里官衙跡の史跡指定地となる。さらに、東西方向に走るSD01によって切り込まれているため、全容は把握することは困難であった。しかし、検出された範囲が狭いながらも、東西に平行して立ち上がる壁と平坦な床面が確認されたため、竪穴建物跡と判断した。規模は東壁から西壁の距離が8.98 mを測ることから一辺が9.00 m前後の規模を有する方形の竪穴建物跡であった可能性が高い。両壁は東側に傾く(N-24°-E)が、東壁側でカマドの痕跡が認められることから、この位置から見た場合の主軸方向はN-114°-Eを示すとみられる。覆土は調査区南側壁で観察したが、現地表面から約120 cm下までは現代の道路工事等による攪乱を受けていたため、遺存した覆土は20 cm程度であった。確認し得た覆土は10層に分層される。黒褐色土と暗褐色土が主体で、全体的にロームブロックや山砂、焼土粒の混入が多く含まれ、やや複雑な堆積を呈していることから、人為的な堆積と考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、直下には幅25 cm、深さ11～24 cmを測る明確な周溝が確認されている。床面は、浅く掘り込まれた掘り方に暗褐色土の貼り床が施され、全面的に硬化が認められた。調査区北壁際でもわずかに残存し、北側へ延びている。建物の東壁際では、やや深めに掘り込まれた部分があり、カマド付近であることから関連した掘り方ではないかと思われる。柱穴は、P1とP2が並列して検出されており、いずれも主柱穴と考えられる。SD01構築の際の削平により原形は留めていないものの、現存する規模、形状は、P1が径69 cm、深さ103 cm、P2が径105 cm、深さ125 cmの共に楕円形で、断面形状は漏斗状を呈したと考えられる。この2基の柱穴は、同様の規模、形状であることから、建て替え等による時間差も想定されるが、新旧関係は不明瞭である。P3は北側調査区外にかかるビットで性格は不明である。規模は径42 cm、深さ33 cmの円形を呈するとみられる。建物西壁付近には長方形の掘り込みが検出されている。規模は、長軸120 cm以上、東西方向の短軸が80 cmを測り、深さは18 cmと浅い。位置的には貯蔵穴の可能性はあるものの、南西側が調査区外と保存指定区域になることもあり、性格は判然としない。6区の東側壁と南側壁の交差する部分の土層には、山砂混じりの粘土や焼土を含む層(6・8層)が認められ、壁を掘り抜いていることから、カマドの煙道部が調査区外の南東側において、崩落の際に流失した可能性がある。

遺物は建物内中心付近に集中して出土する傾向にある。床直上の遺物はほとんど見られず、覆土中からの出土が中心であった。土器の内訳は、土師器88点(坏7、甕81)、須恵器24点(坏5、蓋12、甕3、壺・瓶類2、不明2)となる。接合がかなわない小破片のものが多く、全体的には土師器甕の胴部片が主体で出土している。土師器の坏は、出土した破片の全てが非ロクロ成形である。一方、須恵器では、坏よりも蓋の出土が目立ち、そのほとんどが蓋端部の内面にかえりを有している。その内、5・6は胎土から新治窯跡群産である可能性が高い。7は唯一かえりを持たない蓋の破片で、端部を見ると下方へ短く屈曲させる前段階のようである。土師器の甕は胎土に雲母を含む胴部片の割合が高い。口縁部は単純なヨコナデ成形が主流であるが、8はわずかに積み上げがみられる。10・11の底部片は、胴部から底部にかけて粗目のヘラケズリで調整され、器壁は厚手である。

時期は、遺物が7世紀末葉～8世紀前葉の様相で全て覆土中からの出土であることから、この頃に埋没した可能性が考えられる。



S101 土層説明

1. 黒褐色土 10YR 3/2 ロームブロック(小)・山砂粘土粒含む。締まり・粘性有。
2. 暗褐色土 10YR 3/3 ロームブロック(小)・焼土粒少量含む。締まり有。
3. 黒褐色土 7.5YR 2/2 ローム粒少量含む。やや締まり有。
4. 暗褐色土 10YR 3/4 ロームブロック(小)多量含む。締まり有。
5. 暗褐色土 10YR 3/3 ロームブロック(小)・焼土粒多量含む。締まり有。
6. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒・焼土粒・山砂粘土を含む。締まり有。
7. 黒褐色土 10YR 2/2 ローム粒少量含む。締まり有。
8. 暗褐色土 10YR 3/4 山砂粘土・焼土粒多量含む。やや締まり有。粘性有。
9. 極暗褐色土 7.5YR 2/3 ロームブロック(小)中量含む。やや締まり有。(貯蔵穴状土坑)。
10. 暗褐色土 10YR 3/4 ロームブロック(大)多量含む。締まり有(廻り方)。

S101 貯蔵穴状土坑土層説明

1. 極暗褐色土 7.5YR 2/3 ロームブロック(小)中量含む。やや締まり有。
2. 褐色土 10YR 4/6 ローム粒多量含む。やや締まり有。粘性有。

S101 P1 土層説明

1. 暗褐色土 10YR 2/3 ローム粒中量含む。やや締まり有。
2. 黒褐色土 10YR 2/3 ローム粒少量含む。やや締まり有。

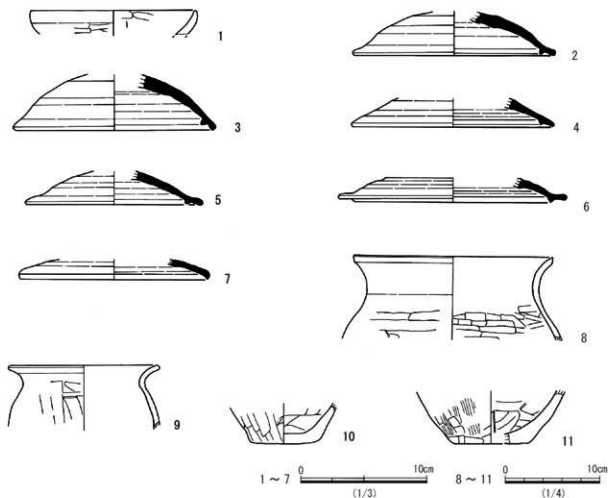
S101 P2 土層説明

1. 暗褐色土 10YR 3/4 ロームブロック(大)中量含む。やや締まり有。
2. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒多量含む。やや締まり有。

S101 P3 土層説明

1. 暗褐色土 10YR 3/4 ロームブロック(小)・焼土粒多量含む。締まり有。
2. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒・焼土粒・山砂粘土が混入する。締まり有。

第8図 S101



第9図 SI01出土遺物

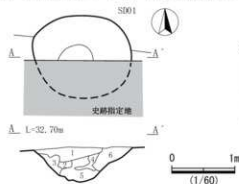
(2) 土坑

SK01 (第10図)

A6グリッドの3・8区に跨って位置する。北側の上部をSD01に切られ、8区にあたる南側半分は史跡指定地のため未調査である。平面形状は楕円形を呈するとみられ、規模は長軸が1.63m、短軸が0.7m以上、深さが最深部で55cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。覆土は黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土からなる6層に分層され、ローム粒を多く含む人為堆積の様相を呈する。

遺物は、須恵器蓋の天井部片が1点のみ出土した。

時期は、出土遺物が少なく不明瞭ではあるが、遺物と覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。



SK01土層説明

- | | | |
|----------|-----------|-----------------------------|
| 1. 極暗褐色土 | 7.5YR 2/3 | ローム粒少量含む。やや縮まり有。 |
| 2. 極暗褐色土 | 7.5YR 2/3 | ローム粒中量含む。やや縮まり有。 |
| 3. 暗褐色土 | 10YR 3/4 | ローム粒多量含む。縮まり有。 |
| 4. 暗褐色土 | 10YR 3/4 | ローム粒中量含む。縮まり有。 |
| 5. 黒褐色土 | 7.5YR 2/2 | ローム粒・ロームブロック(小)少量含む。やや縮まり有。 |
| 6. 暗褐色土 | 10YR 3/4 | ローム粒多量含む。縮まり強。 |

第10図 SK01

SK02 (第11図, 写真図版6)

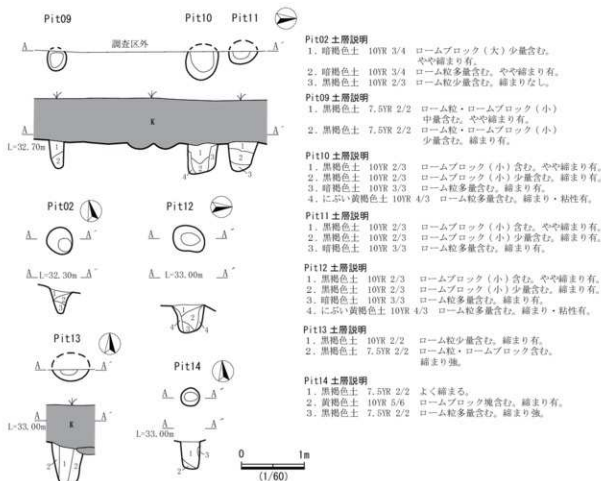
A7グリッドの3区に位置する。北側の上部をSD01, Pit07に切られる。平面形状はほぼ円形とみられ、規模は直径0.6m前後、深さは最深部で43cmを測る。覆土は暗褐色土、褐色土からなる4層に分層され、ローム粒・ロームブロックを多く含む人為堆積の様相を呈する。

遺物は、3層中から1の平瓦1点のみが出土した。

時期は、出土した遺物から奈良・平安時代と考えられ、規模や覆土の状態から、本遺構は建物跡等の柱穴になる可能性もある。



第11図 SK02・出土遺物



第12図 ビット

(3) ビット (第12図・第2表)

ビットは、今次調査において総数で14基が検出された。各ビットの位置は、1区のA2・3グリッドに各1基 (Pit13・14)、2区のA5グリッドに4基 (Pit09～12)、3区のA6～9グリッドに8基 (Pit01～08) である。形状は平面形が円形又は楕円形を基調とし、断面形は単純な筒型を呈するものが多い。覆土はPit01・03～08がいずれも暗褐色土の単層となり、一方でPit02・09～14が黒褐色土を主体とする2～4層に分層される。これら14基の内、3区から検出されたPit01～08はSD01に付設するビット群と考えられ、ほぼ溝の上端付近に沿って、直線状に規則的な間隔で配列された状況が看取される (第12図)。また、Pit02・03・06は上部が溝側に向かって北方向へ斜めに穿たれていた。個々の規模形状と特徴についてはビット一覧表 (第2表) にまとめている。

遺物は、Pit13で土師器壺2点 (口縁部1、底部1) が出土した以外は認められなかった。

各ビットの時期は、覆土の状態からPit01～12までが中・近世で、Pit13・14は奈良・平安時代の所産と考えられる。

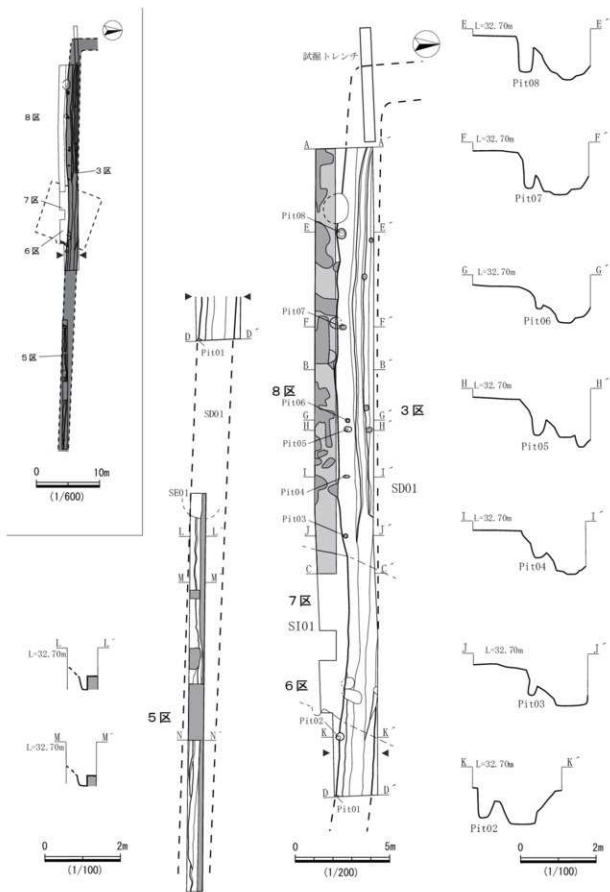
第2表 ビット計測表

遺構名	位置 (グリッド)	形状	規模 (cm)			覆土・特徴・その他	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
Pit01	A9	推定円形	20	<10>	45	暗褐色土10YR3/4単層、一部調査区外	なし	SD01に付設
Pit02	A9	円形	42	39	48	3層 斜めに穿たれる	なし	SD01に付設
Pit03	A8	円形	23	22	36	暗褐色土10YR3/4単層、斜めに穿たれる	なし	SD01に付設
Pit04	A8	長楕円形	35	15	31	暗褐色土10YR3/4単層	なし	SD01に付設
Pit05	A7	楕円形	40	34	44	暗褐色土10YR3/4単層	なし	SD01に付設
Pit06	A7	円形	23	21	33	暗褐色土10YR3/4単層、斜めに穿たれる	なし	SD01に付設
Pit07	A7	円形	34	26	34	暗褐色土10YR3/4単層	なし	SD01に付設
Pit08	A6	円形	55	48	93	暗褐色土10YR3/4単層	なし	SD01に付設
Pit09	A5	円形	<30>	30	45	2層 一部調査区外	なし	
Pit10	A5	円形	50	<43>	46	4層 一部調査区外	なし	
Pit11	A5	円形	44	<21>	46	3層 一部調査区外	なし	
Pit12	A5	不整円形	51	44	45	4層	なし	
Pit13	A3	円形	55	<18>	58	2層、柱痕あり、一部調査区外	土師器壺2点	奈良・平安時代
Pit14	A2	円形	30	28	41	3層	なし	奈良・平安時代

(4) 溝溝

SD01 (第13～15図、写真図版3～7)

A6グリッドからA12グリッドに跨って位置し、3区から5区にかけて横断している。3区は現地表面から約1.3m下まで、また5区の中央部付近から東端が1.46m～1.95m下まで大きく削平されていた。A8・9グリッドではSI01と重複し、その竪穴建物跡の中央部を大きく切り込む。また、A10グリッドではSE01に切られる。上部端は緩やかに蛇行し、さらに調査区外となる部分もあるため不明瞭ではあるものの、直線状に延びている。走行方向はN-88°-Wを示し、ほぼ東西方向を指向していたことがうかがわれた。一方で、5区では東側端に向かうに従って、溝跡の軸線がやや南方向に振れながら調査区外へと延びているようである。いずれの調査区も溝の遺存状態は良好であるが、5区では調査区の幅が0.8mと狭く、その上既設管の埋設により溝底部の一部が確認できずに過ぎない。確認し得た規模は、長さが3区西端から5区東端まで63.10mで、東西両側に延びている。幅は東端D～D'で上端幅が1.78m、下端幅が0.67m、遺構確認面からの深さ92cmを測る。さらに西へ

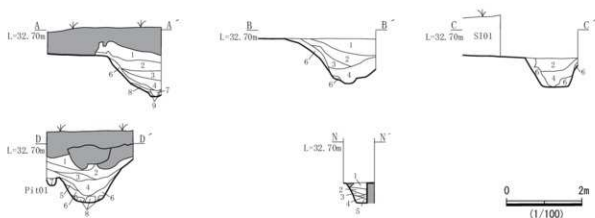


第13図 SD01 (1)

移行するに従って上端幅は計測不能となるが、C～C'では下端幅が0.68 m、深さ75cm、B～B'では下端幅が0.57 m、深さ118 cm、西端壁のA～A'では下端幅0.62 m、深さ98cmである。一方、5区では調査区中央部に設定したN～N'では下端幅0.28cm、深さ50cm、東端壁では下端幅0.66 m、深さ60cmを測る。溝底部の標高は、3区西端のA 6グリッド付近で31.15 mを測り、続いて検出全長のほぼ中央付近にあたるA 9グリッド付近では30.95 mで、西から東にかけて比高差20 cm程度傾斜している。ここから5区もA 12グリッド付近まではさらに傾斜がきつくなり、5区東端における溝底部の標高は30.55 mでA 9グリッド付近との比高差は40 cmであった。溝跡の断面形は法面の角度がやや急な逆台形状を呈する。3区東端から約15 m地点より西側では、溝底面中央に幅0.41～0.57 m、深さ7～10 cmほどの浅い溝が並走する。覆土は、3区両端部の土層では暗褐色土と褐色土が主体となる9層に分層される。これらは基本的に自然堆積の様相であるが、6層以下の褐色土はロームブロックを多く含み、粘性が強く硬く締まった堆積土で、人為的な要因がうかがわれる。なお、今次調査では、3区西側の未調査部分にサプトレンチを設定し、掘削の伴わない確認調査を行っている。その結果、溝跡は3区西端から西方へ43 mの地点で溝と思われる掘り込みが途絶えていることが判明した。掘り込みは南北いずれかの方向へ転換する可能性が示唆される。

遺物は、縄文土器3点（深鉢3）、土師器78点（坏7、甕68、瓶1、壺類1、不明1）、須恵器49点（坏13、盤2、蓋11、甕16、壺・瓶類5、不明2）、瓦5点（丸瓦2、平瓦1、不明2）、鉄製品1点（刀子1）、石器2点（磨石2）などが、覆土の上層から下層にかけて出土している。

時期は、出土遺物が多時期にわたるため不明瞭であり、覆土の状態からも判断は困難である。ただし、7世紀末から8世紀前葉のSI01を切り込み、15世紀後半のSE01に切られている新旧関係から、その狭間の期間に構築されたことが明らかとなっている。



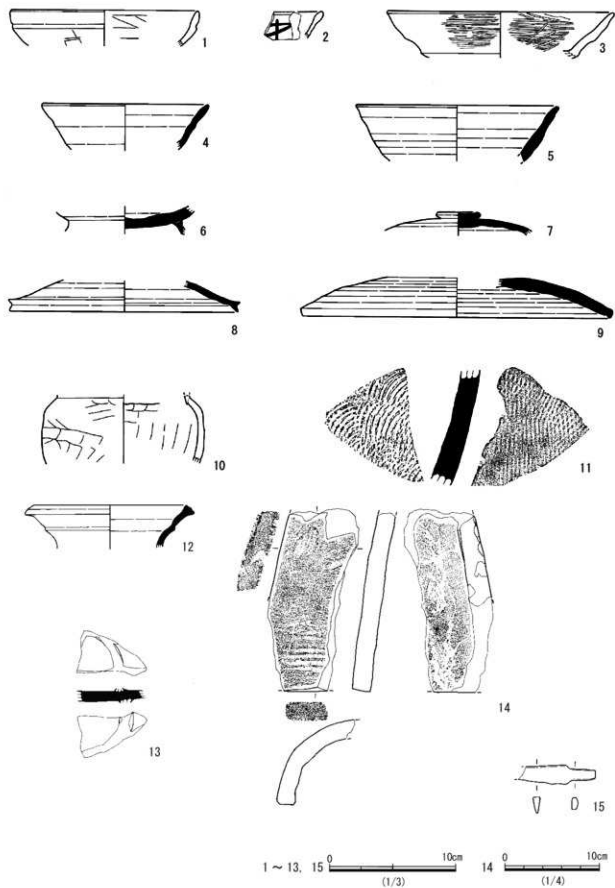
SD01 土層説明 (A～A', B～B', C～C', D～D')

1. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒微量含む。締まり有。
2. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒少量含む。締まり有。
3. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム粒中量含む。締まり有。
4. 暗褐色土 7.5YR 3/4 ローム粒・ロームブロック（小）中量含む。締まり有。
5. 暗褐色土 7.5YR 3/4 ローム粒多量含む。やや締まり有。
6. 褐色土 10YR 4/4 ローム粒・ロームブロック（小～中）多量含む。硬く締まる。
7. 黒褐色土 10YR 2/2 ローム粒・ロームブロック（小）少量含む。やや粘性有。
8. 褐色土 10YR 4/4 ローム粒・ロームブロック（小）多量含む。硬く締まる。
9. 褐色土 10YR 4/4 ロームブロック塊含む。硬く締まる。

SD01 (5区) 土層説明 (N～N')

1. 黒褐色土 10YR 2/2 ローム粒少量含む。
2. 黒褐色土 10YR 2/2 ローム粒中量含む。締まり有。
3. 黒褐色土 10YR 2/3 ローム粒中量含む。締まり有。
4. 黄褐色土 10YR 5/6 ローム粒・ロームブロック（小）多量含む。締まり有。
5. 黒色土 10YR 2/1 ロームブロック（小）少量含む。締まり有、粘性強。

第14図 SD01 (2)

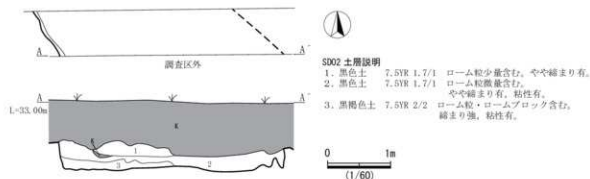


第15図 SD01 出土遺物

SD02 (第16図, 写真図版1)

A2グリッドの1区に位置する。本遺構は狭い調査区内を南北方向に縦断しており、走行方向はN-35°-Wを示す。削平により遺存状況は悪く、確認し得たのは遺構の西側で検出した僅かな立ち上がりで、調査区南側壁の上層に残る東側の立ち上がりの痕跡のみであった。規模は、幅が3.38m深さは西側壁直下で40cmを測る。想定される断面形はごく浅い箱形を呈するものと思われ、底部は凹凸が顕著であった。覆土は3層に分層され人為的な様相である。

遺物は出土せず、覆土の状態も不明瞭であることから、本遺構の時期は判然としない。

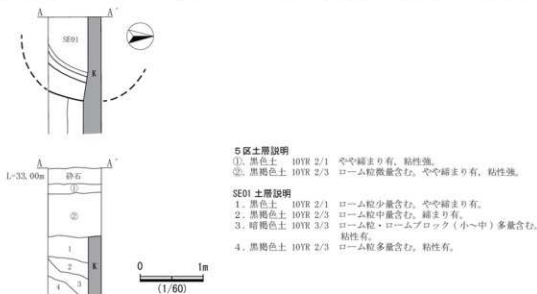


第16図 SD02

(5) 井戸跡

SE01 (第17・18図, 写真図版5・7)

A10グリッドの5区西端部に位置する。5区は現地表面から1.1~1.3m下まで大きく削平されていた。検出された部分は井戸跡本体のごく一部で、大部分は調査区外となるためその全容は把握されなかった。平面形は、円形又は楕円形を呈するものとみられる。断面形は上部の開口部から下方へ向かって深さ27cmのところまで挿鉢状に掘り込まれ、それ以下は円筒形で垂直方向に穿たれる漏斗状を呈している。覆土は黒褐色土とロームブロックを多く含む暗褐色土が主体の4層に分層され、閉塞する際に人為的に埋め戻されたと考えられる。2層以下は水気を帯び、粘性も強い。掘り下げは現地

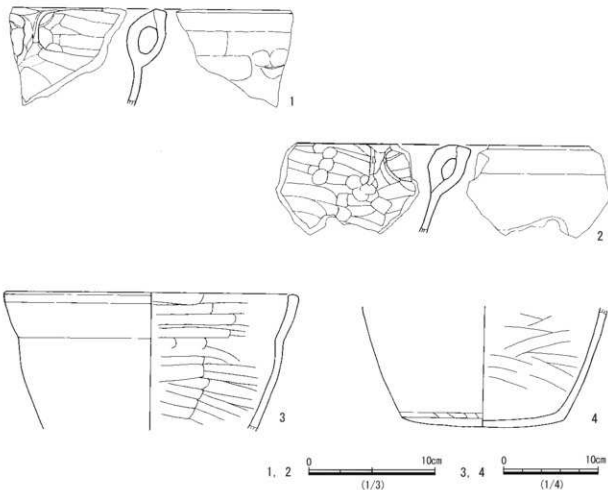


第17図 SE01

表面から約2m下までの掘削を試みたが底部には到達せず、安全上を考慮して完掘を断念した。

遺物は、須恵器3点(甕3),土師質土器類5点(内耳土鍋4,鉢1),瓦2点(平瓦2),石器1点(磨石1)のほか、製鉄に関連したと思われる大小の鉄滓が12点出土している。

時期は、最新遺物である内耳土鍋がまとまっていることを重視し、15世紀後半と考えられる。



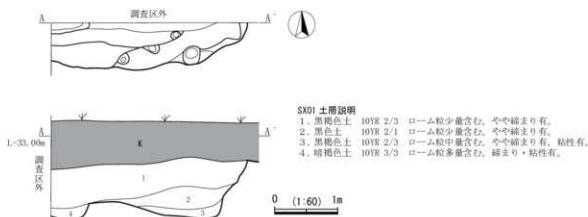
第18図 SE01出土遺物

(6) 不整形遺構

SX01 (第19図, 写真図版1)

A4グリッドの2区に位置する。2区は現地表面から80cm下まで削平されていた。検出されたのは本遺構の南側部分で、北側は調査区外となるため、全容は把握されなかった。形状は、調査区の西側壁下から北側壁沿いを東側に向けて延びる不整形で、断面形は底面の凹凸が顕著ではあるものの鍋底状を呈している。規模は長軸が3.12m以上、短軸が0.75m以上、深さは最深部で94cmとなる。覆土は黒色土、黒褐色土を主体した4層に分層され、3・4層はローム粒の含有率が高く粘性を帯びる。この内、3層は奈良・平安時代の覆土と類似しており、上層の覆土とは異質な様相がうかがえる。

遺物は出土せず、本遺構の性格や時期などは判然としない。



第19図 SX01

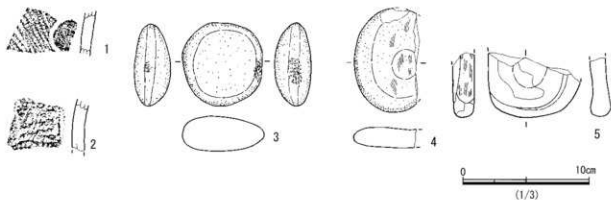
(7) 遺構外出土遺物 (第20・21図, 写真図版7・8)

ここでは、遺構に伴わない各調査区で表採された遺物、又は遺構内からの出土ではあっても、遺構の時期に伴わない遺物を掲載した。

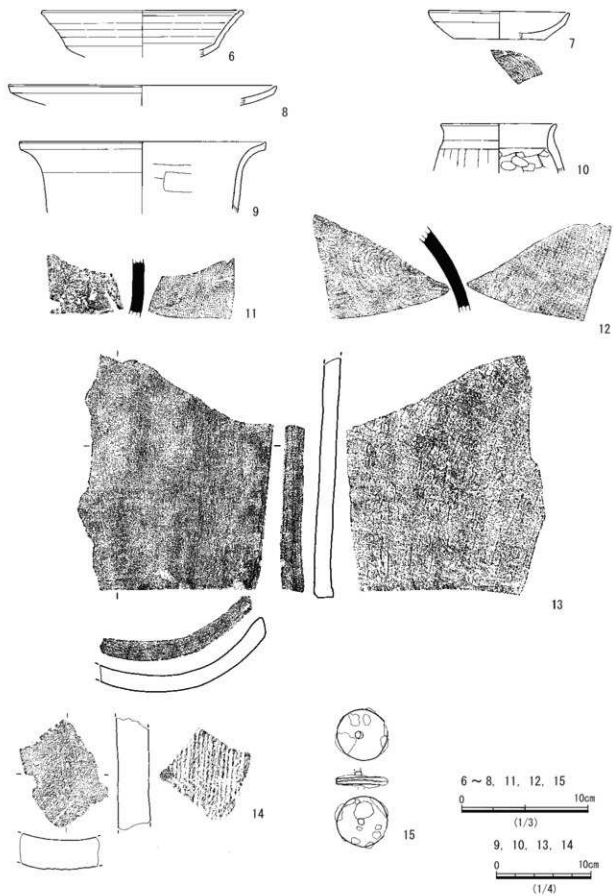
1～5は縄文時代所産の遺物と考えられる。主に3区内又は同区のSD01から出土している。1・2は縄文土器深鉢の胴部片で、1は沈線内を磨り消し、2は地文縄文に直線的な沈線が施されている。3～5は石器・磨石である。3は敲打痕が側縁に認められ、この1点のみが5区SE01から奈良・平安時代～中世の遺物に混在して出土している。4・5は扁平で皿状に窪み、5は窪み中央部が多少黒ずんでいる。

6以降は奈良・平安時代の遺物と考えられる。6は薄手の土師器で、体部下端が丸みを持つことから碗とみられる。SI01から出土しているが、形態から10世紀代の新しい時期とみられる。7は出土した土師器小皿で、底部が回転糸切りになることから11世紀代以降と考えられる。8は非口口形成形の土師器で、盤と判断した。色調が赤みを帯びることから赤彩が施された可能性がある。9・10は土師器甕の口縁部～胴上部にかけての破片で、9は口縁部が大きく開き、10は小型で口縁部が短く立ち上がる形態である。11・12は須恵器甕の胴部片である。11は外面に同心円の叩きが施され、調整技法や胎土から新治窯跡群産の破片とみられる。13・14は平瓦で、13は4区攪乱内からの出土で凸面の格子叩きが浅い。14は縄叩きの小破片で、SE01に混在していた。15は5区SD01内から出土した鉄製紡錘車である。軸部はほとんど欠損しているものの、紡輪部は完存し、薄い鉄板が2枚重ねられていたようで、剥離した隙間が認められた。

(斎藤・高野)



第20図 遺構外出土遺物(1)



第21図 遺構外出土遺物(2)

第3表 出土遺物観察表(土器)

遺構番号	図面番号	種類 器種	口縁部 高さ 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外内)	焼成	備考
S101	1	土師器 杯	(13.0) (2.0) —	口縁部へ体部片。外面口縁部ヨコナデ、体部横方向へラナデ、内面へラナデ。	白色粒、透明粒、赤褐色粒微	暗褐(7.5YR3/3) ; 灰褐(7.5YR4/2)	普通	
S101	2	須恵器 蓋	(15.6) (3.5) —	30%存。横部欠失、ロクロ成形、外面天井部上部同転へラケズリ、内面口縁部かえりあり。	白色粒、白色透明砂礫多	灰(04/); 灰(05/)	良好 堅緻	
S101	3	須恵器 蓋	(15.4) (4.4) —	20~30%存。ロクロ成形、外面天井部上半回転へラケズリ、内面口縁部かえりあり。	白色砂礫多、チャート、白色針状物微	青灰(5P85/1) ; 青灰(5P85/1)	良好 堅緻	
S101	4	須恵器 蓋	(15.8) (2.3) —	口縁部片。ロクロ成形、内面かえりあり。	白色砂礫、白色透明砂礫多	黄灰(2.5Y5/1) ; 灰(5Y4/1)	良好 堅緻	
S101	5	須恵器 蓋	(13.6) (2.6) —	天井部へ口縁部片。ロクロ成形、外面天井部上部同転へラケズリ、内面口縁部かえりあり。	雲母多、白色砂礫多	黄灰(2.5Y6/1) ; 黄灰(2.5Y6/1)	良好	新治窯跡群産?
S101	6	須恵器 蓋	(18.0) (1.9) —	天井部下半へ口縁部片。ロクロ成形、内面口縁部かえりあり。	雲母多、白色砂礫、白色透明砂礫	灰黄褐(10YR5/2) ; 黄灰(2.5Y4/1)	普通	新治窯跡群産?
S101	7	須恵器 蓋	(14.8) (1.6) —	口縁部片。ロクロ成形。	白色砂礫多、チャート、白色針状物	灰白(7.5Y7/1) ; 灰(5Y6/1)	普通	
S101	8	土師器 甕	(21.0) (8.8) —	口縁部へ胴上部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面横方向ナデ。	雲母多、白色砂礫多	褐(5YR6/6) ; にぶい・褐(5YR6/4)	普通	
S101	9	土師器 甕	(16.0) (6.8) —	口縁部へ胴上部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外縦方向へラケズリ、内面器面荒れ調整不鮮明。	黒色粒、赤褐色粒	にぶい・褐(5YR6/4) ; 灰黄褐(10YR5/2)	普通	
S101	10	土師器 甕	(4.4) 7.5 —	胴部下端へ底部片。外面胴部縦方向へラケズリ、底部底面不定方向へラケズリ、内面横方向へラナデ。	赤褐色粒、角閃石、砂礫	にぶい・赤褐(5YR5/4) ; 褐(5YR6/6)	良好	
S101	11	土師器 甕	(5.6) (7.6) —	胴部下端へ底部片。胴部外面縦方向へラケズリ後タテミガキ、底部底面へラナデ、内面横・斜方向のへラナデ。	透明粒、白色粒、白色針状物	にぶい・褐(7.5YR5/3) ; 褐(7.5YR6/6)	普通	
SD01	1	土師器 杯	(14.7) (2.8) —	口縁部へ体部片。内外黒色処理。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面へラケズリ、内面へラナデ。	白色粒、赤褐色粒多	黒褐(7.5YR3/2) ; 黒褐(5YR3/1)	良好	
SD01	2	土師器 杯	(2.2) —	口縁部片。ロクロ成形、外面に墨書「口」(判読不明)あり。	白色粒、角閃石・輝石類、白色針状物	にぶい・褐(7.5YR7/4) ; にぶい・褐(7.5YR6/4)	普通	
SD01	3	土師器 杯	(17.6) (3.6) —	口縁部へ体部下端片、内外面黒色処理。外面口縁部ヨコナデ後体部にかけ横方向の密なミガキ、内面口縁部ヨコナデ後斜方向のミガキ、体部横方向の密なミガキ後斜方向のまばらなミガキ。	透明粒、赤褐色粒、白色透明砂礫	にぶい・黄褐(10YR5/3) ; にぶい・黄褐(10YR5/4)	普通	葉面式の影響?
SD01	4	須恵器 杯	(13.0) (3.6) —	口縁部へ体部片。ロクロ成形。	白色砂礫多、白色透明砂礫	青灰(5P85/1) ; 灰(06/)	良好 堅緻	
SD01	5	須恵器 杯	(15.8) (4.4) —	口縁部へ体部片。ロクロ成形、内外面に墨痕あり。	白色砂礫、灰色砂礫、白色針状物微	黄灰(2.5Y6/1) ; 灰(5Y6/1)	良好 堅緻	
SD01	6	須恵器 盤	(2.2) —	底部片。ろくろ成形、高台部貼り付けナデ。	白色砂礫、チャート、黒色粒、白色針状物	灰(5Y5/1) ; 灰(05/)	良好 堅緻	
SD01	7	須恵器 蓋	(1.8) —	天井部片。ロクロ成形。横部は直径3.5cm、趾高0.5cm、上面くぼみ盛状、外面の一部に自然釉。	白色砂礫(大粒)、黒色粒	灰(04/); 灰(05/)	良好 堅緻	8と同一
SD01	8	須恵器 蓋	(18.0) (2.5) —	須恵器。外面に自然釉。端部は下方へ屈曲させ外面上部が突出。	白色砂礫、黒色粒	灰(7.5Y6/1) ; 灰(04/)	良好 堅緻	7と同一 個体
SD01	9	須恵器 蓋	(24.0) (3.1) —	天井部へ端部片。ロクロ成形、外面に自然釉。横部欠失。端部内面を押し下方へ短く屈曲させる。	白色砂礫少、チャート少、黒色粒	黄灰(2.5Y6/1) ; オリーブ灰(10Y4/2)	良好 堅緻	
SD01	10	土師器 甕	(7.2) —	胴部へ胴部片。外面胴上部横へ斜方向、下部縦方向のへラケズリ、内面胴部へ胴上部はへラナデ、上部ナデ、胴部縦方向のへラナデ。	透明粒、灰色粒、白色透明砂礫	にぶい・赤褐(5YR5/4) ; にぶい・黄褐(10YR7/4)	普通	
SD01	11	須恵器 甕	(9.4) —	胴部片。外面平行タタキ、内面同心円状当て具痕。	白色粒、黒色粒、白色針状物	灰白(2.5Y7/1) ; 灰(5Y5/1)	良好 堅緻	
SD01	12	須恵器 長頸壺	(12.0) (3.5) —	口縁部片。ロクロ成形、内面自然釉。	白色粒、黒色粒、赤褐色粒	灰白(07/); 灰オリーブ(7.5Y4/2)	良好 堅緻	
SD01	13	須恵器 不明	(1.2) —	断面に墨状の突帯が溜り、いづれかが高台状になるものであろうか。	雲母、白色粒、透明砂礫	黄灰(2.5Y6/1) ; 灰黄(2.5Y6/2)	普通	新治窯跡群産?

第3章 調査の成果

遺構番号	図面番号	種類 器種	口徑 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面：内面)	焼成	備考
SE01	1	土師質 土器 内耳土鍋	(7.7) —	耳部片。外面口縁部に残付着。内外面横方向へラナゲ。	白色粒少。 赤褐色粒少。 角閃石・輝石類多	灰黄褐(10YR5/2)： にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	
SE01	2	土師質 土器 内耳土鍋	(7.2) —	耳部片。外面残付着。内外面横方向へラナゲと指頭による調整。	白色粒。 角閃石・輝石類、 白色針状物	黒褐(5YR3/1)： 明赤褐(5YR5/6)	良好	
SE01	3	土師質 土器 内耳土鍋	(31.0) (14.5) —	口縁部～胴部片。外面残付着。内外面横方向へラナゲ。	赤褐色粒少。 角閃石・輝石類多	黒褐(7.5YR3/1)： にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	
SE01	4	土師質 土器 内耳土鍋	(17.2) (12.8) —	胴部～底部30～40%存。外面残付着。胴部下端へラケズリ。底部底面ナゲ。内面胴部横～斜方向へラナゲ。底部に残付着。	白色粒。 赤褐色粒。 角閃石・輝石類多	黒褐(7.5YR3/1)： にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	
遺構外	1	縄文土器 深鉢	(3.5) —	胴部片。沈線内磨り消し。地文縦回転の単節L R縄文。	白色砂礫。 赤褐色粒。 角閃石	にぶい橙(7.5YR6/4)： にぶい黄橙(10YR7/4)	普通	3区SD01 出土
遺構外	2	縄文土器 深鉢	(4.1) —	胴部片。沈線垂下。地文斜回転の単節L R縄文。	赤褐色粒。砂礫多	にぶい赤褐(5YR5/4)： にぶい黄橙(10YR7/4)	普通	3区出土
遺構外	6	土師器 杯	(15.6) (3.7)	口縁部～体部片。口口ロ成形。内面口縁部直下浅い比喩。	雲母。赤褐色粒。 白色砂礫多	にぶい黄褐 (10YR5/4)： にぶい橙(7.5YR5/3)	良好	S101 出土
遺構外	7	土師器 杯	(11.0) 2.2 (7.2)	口縁部～底部片。口口ロ成形。外面一部へラナゲか。底部底面回転未切り。	白色粒。 赤褐色粒微。 白色砂礫	橙(7.5YR6/6)： 橙(5YR6/6)	良好	4区出土
遺構外	8	土師器 杯	(21.0) (1.6) —	口縁部片。口口ロ成形。	白色砂礫。 白色針状物。 角閃石・輝石類	黒褐(7.5YR3/2)： 赤褐(5YR4/6)	良好	3区出土 盤状
遺構外	9	土師器 甕	(26.0) (7.5) —	口縁部～胴上部。口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ナゲ。内面横方向へのラナゲ。	雲母。白色砂礫。 砂粒	にぶい黄橙 (10YR6/4)： 橙(7.5YR7/6)	良好	3区出土
遺構外	10	土師器 甕	(12.0) (5.2) —	口縁部～胴部片。口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面縦方向へラケズリ。内面横方向へラナゲ。	白色粒。 白色透明砂礫少。 角閃石・輝石類	にぶい赤褐(5YR5/4)： にぶい黄橙(10YR7/4)	普通	3区出土
遺構外	11	須恵器 甕	(4.5) (6.7) —	胴部片。外面同心円状タタキ。内面へラナゲ。	雲母。白色粒	灰黄(2.5Y6/2)： 灰黄(2.5Y7/2)	普通	3区出土
遺構外	12	須恵器 甕	(6.7) —	胴部片。外面平行タタキ。内面同心円状出で具底。	白色粒多。黒色粒	灰(3S/5)： 灰(3S/1)	良好 精研	5区出土

第4表 出土遺物観察表(瓦)

出土 地点	図面 番号	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面筋路・調整	凸面筋路・調整	胎土・鉱物	色調 (凹面：凸面)	焼成	備考
SK02	1	(6.9)	2.2	成形:糸目正直 調整:側縁部へラケズリ	成形:— 調整:斜方向へラナゲ	赤褐色粒。透 明粒。白色粒 微	にぶい橙 7.5YR7/4; 残黄 橙7.5YR8/4	普通 未還元	平瓦。側端部片。凹面側縁部のへラケズリは幅広く端部は鋭角的。
SD01	14	(18.6)	1.9	成形:糸目正直 調整:側縁部へラケズリ	成形:格子タタキ 調整:ヨコへラナゲ	白色砂礫。白 色透明砂礫。 チャート微	にぶい黄橙 10YR7/3; にぶい 黄橙10YR6/4	普通	丸瓦。広端部片。左側端部残存。凹面合せ縁い。布かぶり末端あり。重量(689.5g)
遺構外	13	(25.3)	1.7	成形:糸目正直 調整:側縁部へラケズリ	成形:浅い格子タ タキ 調整:—	白色粒。チャ ート。白色針 状物	灰黄褐 10YR6/2; にぶい黄橙 10YR7/3	普通	平瓦。狭端部片。左側端部残存。一枚作り。端部丁寧な面取り。側部に指頭痕の押印あり。4区出土。重量(1330.0g)
遺構外	14	(11.6)	3.1 ～ 3.3	成形:糸目正直 調整:—	成形:縄タタキ 調整:—	浅黄褐 10YR8/3; 浅黄 橙10YR8/4	普通 未還元	平瓦。凹面未切り痕あり。摩耗顕著。SE01出土。重量(393.4g)	

第5表 出土遺物観察表(石器)

遺構 番号	図面 番号	種類 器種	部位・残存率・製作技法・その他特徴	備考
遺構外	3	石器 磨石	全長:6.6cm 幅:6.3cm 厚さ:2.2cm 重量:175.0g 石材:砂岩 完全。両側面に敲打痕。	SE01出土
遺構外	4	石器 磨石	全長:(8.2cm) 幅:(4.9cm) 厚さ:1.6cm 重量:(106.7g) 石材:多孔質安山岩 扁平の中央部がわずかにくぼむ。	3区SD01出土
遺構外	5	石器 磨石	全長:(5.3cm) 幅:(7.3cm) 厚さ:1.2cm 重量:(81.8g) 石材:安山岩 石皿状にくぼみ。部分的に黒ずみが広がる。片面磨り面。	3区SD01出土

第6表 出土遺物観察表(鉄製品)

遺構番号	国面番号	種類器種	部位・残存率・製作技法・その他特徴	備考
SD01	15	鉄製品 刀子	長さ:全長(6.1cm) 身(4.1cm) 茎2.0cm, 厚さ:刃0.1cm 背0.5cm 茎0.5cm, 重量:(10.5g) 切先欠損。	
遺構外	15	鉄製品 紡錘車	全長:(1.1cm) 紡輪径:4.0cm 厚さ:0.6cm 軸径0.5cm 重量:(22.2g) 紡輪部充存。板2枚重ねが剥離。軸部4ヶ所に残存。	5区出土

第7表 出土遺物集計表

出土遺構			SI01	SD01	SD02	SK01	SK02	Pit13	SE01	2区	3区	4区	5区	9区	合計												
種別	器種	部位	特徴	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片	個片												
縄文土器	深鉢	胴部	単部縄文		2							2			4												
			磨消縄文		1											1											
土師器	坏	口縁		3	5							1	1		10												
			体部		4	2								1	7												
			底部	糸切								1				1											
	甕	口縁	雲母		1											1											
			雲母無		3	2	1			1			4			11											
			胴部	雲母		3											3										
		胴部	ぎり・雲母		40	1											41										
			雲母		25	17										1	43										
			雲母無他		7	44							32		5		88										
	底部		2	4	1			1							8												
	甕	底部		1												1											
	甕			1												1											
不明			1												1												
土師器	坏	口縁		3	11						1	3			18												
			体部			2						2				4											
			底部	手持・9		1											1										
	高台坏	底部	回転・9・雲		1											1											
												1				1											
						1										1											
須恵器	盤	口縁				1									1												
			底部				1									1											
	蓋		雲母		2											2											
			雲母無		10	11		1				3				25											
	甕	胴部	平行明		3	16				3		4		3		29											
	意・瓶	自然輪		2	5											7											
不明			2	2											4												
土師質土器	内耳土罎	口縁							3							3											
			底部						1							1											
	鉢類	口縁								1						1											
体部											1					1											
瓦	丸瓦				2										2												
			平瓦		1				1		2	1		3		8											
不明				2							1				3												
鉄滓				2						12		1			15												
鉄製品	刀子				1											1											
			紡錘車												1		1										
土塊				6	1										7												
石器	磨石				2					1						3											
			安山岩		3	10											13										
石・礫	砂岩	Fe+		1	3											4											
				2	1											3											
			粘板岩		1												1										
			不明		2												2										
不明	—	—		2											2												
合計			0	124	0	160	0	2	0	1	0	1	0	2	0	23	0	3	0	55	0	4	0	10	0	1	386

第4章 総括

1 土地利用の変遷

今次調査における最古の土地利用は縄文時代中期で、当該時期の所産と思われる深鉢形土器の胴部片が出土しているが、関連する遺構は検出されなかった。当該地点は台地中央部に位置しているため、縄文時代の遺構はより台地縁辺部に展開している可能性が高い。

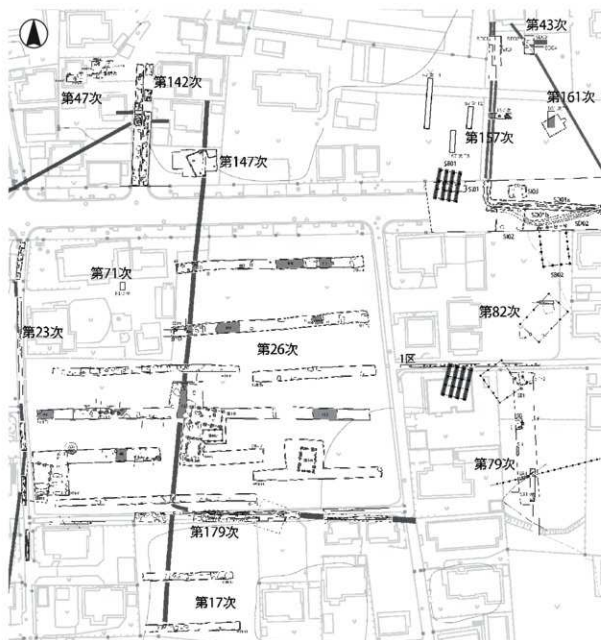
遺構としての土地利用が確認できるのは、古墳時代終末期（7世紀末）から奈良時代初頭（8世紀前葉）の竪穴建物跡（SI01）である。北側隣接地において実施した第26次調査では、7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる竪穴建物跡が5軒確認されており（川口・渥美編 2007）、さらに約100m北東方向において実施した第8次調査では、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に位置づけられる竪穴建物跡が4軒検出されている（井上・千葉 1995）。また、今次調査地点に南接する第17次調査の03N-T3で検出された002号遺構も一辺が7.4mと大型の竪穴建物跡で、台付長頸瓶が出土していることから7世紀第4四半期に位置づけられている（川口・小松崎・新垣編 2005）。このような周辺の遺構分布も併せて同時期の集落が今次地点まで広がることが判明した（第22図）。

今次調査のSI01は、一辺が8m以上を測る大型竪穴建物跡で東側にカマドが付設されている。第26次調査の05N-T4調査区で検出された004号遺構と規模や形態の面で類似しており、出土遺物も同様であることから関連性がうかがえる。

また、第8次・26次両地点での竪穴建物跡の配置を見ると、3～4軒がややまとまって分布しているように見えることから、今次調査の集落はさらに南側へと展開する可能性が示唆される。このような大型施設を含む集落は、台渡里廃寺跡観音堂山地区初期寺院の造営集団の存在や官衛史跡の一部である可能性が指摘されており（渥美・川口編前掲）、さらなる今後の調査進展が俟たれるところである。

竪穴建物跡SI01を分断して東西方向に掘り込まれているのが溝跡（SD01）である。SD01は15世紀後半の遺物を包含する5区の井戸跡（SE01）に切られていた。これらの重複関係から、溝跡の時期は8世紀前葉以降、15世紀前半までに利用されたことが明らかとなった。出土遺物を見ると、重複する竪穴建物跡から流入したとみられる土師器（SD01-1）や須恵器（SD01-7・8・11）、平安時代の須恵器（SD01-4）など新田の遺物が混在していることを鑑みると、周囲で変遷していく生活域の中で比較的長期にわたって利用されたと考えることができる。

今次調査のSD01は3・5区で連続し、東側は5区以東まで延びるが、西側は3区西側で掘り込みが途絶えていることが確認されている。この途絶えた位置から見て、本遺構は北側の第26次調査の05N-T4・6・7調査区で検出された南北方向に走る溝跡002号遺構に接続するとみられる（第22図）。その場合、問題になるのは002号遺構が台渡里廃寺跡南方地区の東側寺院地区画溝として推定されていることである（川口・小松崎・新垣前掲）。区画がさらに東側へと展開するということは、寺院の区画ではなく、東方に展開する別の官衛施設を区画する可能性も視野に入れていく必要が今次調査の結果判明したのである。SD01の性格については今後の周辺におけるさらなる調査の蓄積により解明されていくことを期待したい。（高野）



第22図 台渡里官衙遺跡群第179次調査周辺における遺構の分布状況 (S-1/1200)

2 東北地方との関わり

今次調査における出土遺物の中で東北地方との関わりを示唆する遺物がSD01から出土した土師器坏(第15図3)である。本資料は底部を欠失しているものの、丸底になると考えられ、口縁が大きく外反し、底部と口縁と間に稜を有する。器面の内外には黒色処理が施されたうえで、丁寧なミガキ調整が行われている。こうした技術的形態の特徴を有する土師器坏は、東北地方に分布するいわゆる「栗匭式」の土師器坏と類似する特徴であり、菅原祥夫による分類の坏E類(菅原 2007a・2007b)に相当する。菅原によると茨城県に北接する福島県の中通り地方南部・中部では、坏E類は6世紀末～7世紀前半に位置づけられるⅣ期に出現し、7世紀中頃～後半に位置づけられるⅤ期、7世紀末から8世紀前半に位置づけられるⅥ期にも見られるようである(菅原掲掲)。



第23図 台渡里官衙遺跡宿屋敷地区から出土した東北系土器

台渡里官衙遺跡群では7世紀後半以降、寺院や官衙の造営が開始されていることから、第15図3の土師器環は7世紀後半～8世紀前半のどこかに位置づけられるものと考えられる。この土師器環が東北地方からもたらされた搬入品なのかあるいは在地で生産されたものなのかという問題は、胎土分析や肉眼観察等による比較分析を行っていない現時点では定かではないが、地域もかなり離れており、現時点では模倣品として理解しておくのが妥当であろう。

同様の土師器環は、台渡里官衙遺跡宿屋敷地区において出土例があり、第8次調査で検出された第二号溝跡からも出土している(第23図1)。こうした遺物が台渡里官衙遺跡群から出土する背景には、俘囚の移配等を背景とした土器製作情報の伝達が想定されるが、東北地方との関わりを示唆する遺物として今後注目していくべきであろう。(米川)

【引用・参考文献】(五十音順)

- | | |
|------------------|--|
| 源美賢吾・川口武彦編 | 2011 『台渡里3—平成19～20年度長若山地区範囲確認調査概報—』水戸市教育委員会 |
| 井上義安・千葉隆司 | 1995 『水戸市台渡里廃寺跡』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会 |
| 井上義安・千葉隆司ほか | 1995 『水戸市堀遺跡』水戸市堀遺跡発掘調査会 |
| 川口武彦・源美賢吾ほか | 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会 |
| 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 | 2005 『台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書—』水戸市教育委員会 |
| 菅原祥夫 | 2007a 「第Ⅱ章 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 i. 福島県中通り地方南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人・東北学院大学文学部 |
| 菅原祥夫 | 2007b 「第Ⅱ章 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 ii. 福島県中通り地方中部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人・東北学院大学文学部 |
| 高野浩之・関口慶久・川口武彦 | 2008 『渡里町遺跡(第6地点)一市道常磐34275号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会 |
| 早川龍司・佐々木義則 | 2017 『茨城県における東北地方からの移民の痕跡—長瀬道カマドと東北系遺物から俘囚移配を考える—』『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開シンポジウム「俘囚・蝦俘」と呼ばれたエミシの移配と東国社会—強制移住させられたエミシはどこに居たのか?そして何をしていたのか?—』平野修 |
| 間宮正光・米川暢敬 | 2015 『堀遺跡(第4地点)一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・株式会社 KUNO・株式会社地域文化財研究所 |
| 水戸市教育委員会 | 2012 『古代常陸の原像—那賀郡の成立と台渡里官衙遺跡群—』 |

写真図版



1区全景 (東から)



SD02 全景 (北から)



SD02 土層断面 (北西から)



2・9・10区全景 (西から)



SX01 全景 (東から)



SX01 土層断面 (南東から)

図版 2



3・6・7・8区遺構確認状況（西から）



3・6・7・8区全景（西から）



S101 全景（北西から）



S101 遺物出土状況（北東から）



S101 主柱穴及びピカマド付近土層断面（北から）



S101 西壁際貯蔵穴状掘り込み（北東から）



SD01 (5区) 全景 (西から)



SD01 (3区) 全景 (東から)



SD01 (3区) 近景 (北西から)



SD01 (3区) 近景 (東から)



SD01 (3区) 土層断面 (B~B') (西から)



SD01 (3区) 土層断面 (C~C') (西から)



4区全景 (東から)



5区全景 (西から)



SD01 (5区) 全景 (西から)



SD01 (5区) 近景 (西から)



SD01 (5区) 土層断面 (西から)



SE01 全景及び土層断面 (東から)



5区東側土層断面 (西から)



5区西側土層断面 (東から)



8区確認状況 (西から)

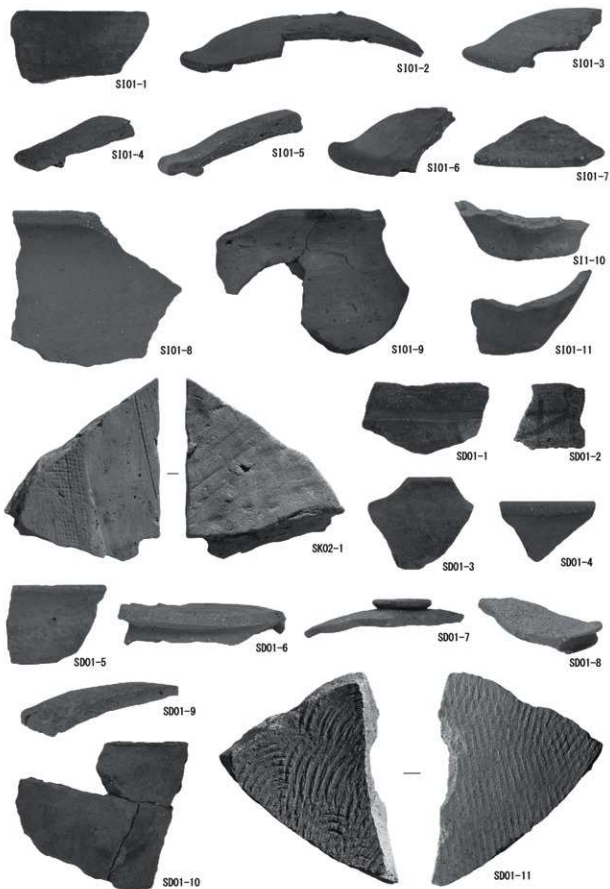


9区確認状況 (東から)

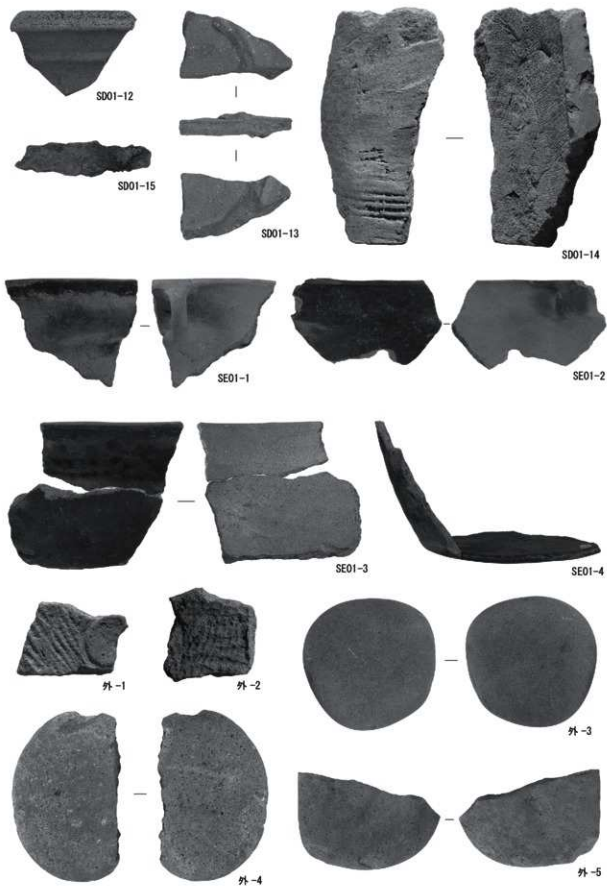


10区確認状況 (西から)

図版6

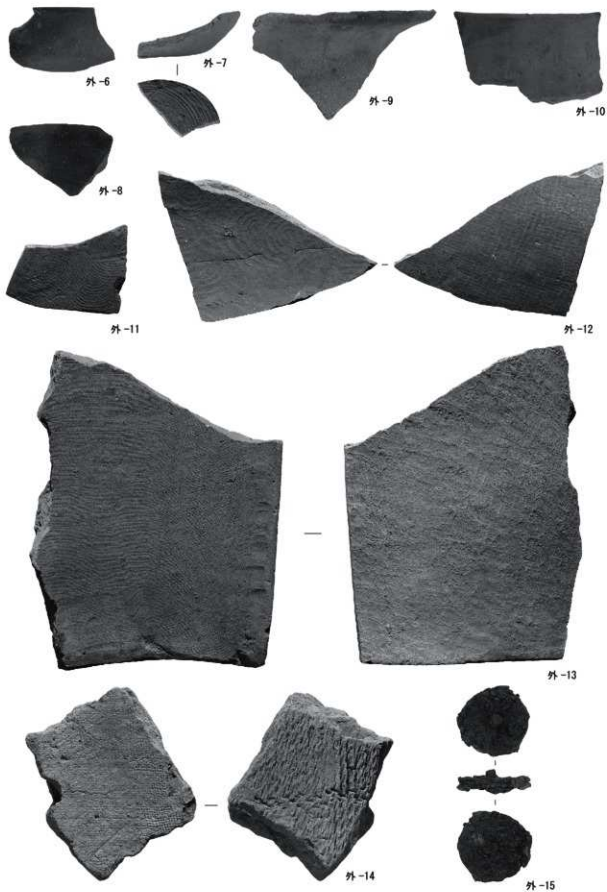


S101, SK02, SD01 出土遺物



SD01, SE01, 遺構外出土遺物 (1)

図版 8



遺構外出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	だいわり にじゅういち							
書名	台渡里 21							
副書名	市道常磐21号線狭い道路整備及び公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (台渡里第179次)							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	米川暢敬 高野浩之							
編集機関	株式会社地域文化財研究所／〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 電話:0476-42-7820							
発行機関	水戸市教育委員会／〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 電話:029-224-1111 (担当) 教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター 電話029-269-5090 株式会社地域文化財研究所／〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 電話:0476-42-7820							
発行年月日	2019(令和元)年9月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
かわらけはてあと 台渡里廃寺跡 かわらけがみ 台渡里官衙遺跡	いげんがみま 上しわがらちま 茨城県水戸市渡里町 2882-2番地先～ 2873-1番地先	201	098 276	36° 24' 28"	140° 26' 00"	2019.03.01 ～ 2019.05.14	180㎡	市道改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
台渡里廃寺跡 台渡里官衙遺跡	包蔵地	縄文時代	—	縄文土器(深鉢) 石器(磨)石		竪穴建物跡は、 出土遺物から7 世紀末～8世紀 前葉の時期と考 えられ、一辺が 8mを超える大 型である。		
		奈良・平安時代	竪穴建物跡	1棟	土師器(坏・甕) 須惠器(坏・蓋・甕・ 長頸壺)			
			土坑	1基	瓦(丸瓦、平瓦)			
	集落跡	中・近世	ピット	2基	鉄製品(刀子・紡錘車)			
			溝跡	1条	内耳土鍋			
		不明	溝跡	1条				
井戸跡	1基							
溝跡	1条							
不整形遺構	1基							
要約	台渡里第179次地点は、台渡里廃寺跡南方地区と台渡里官衙遺跡宿屋敷地区に跨る。遺構は古墳時代終末期～奈良時代初頭の竪穴建物跡1棟と8世紀中葉から15世紀前半に利用されたとみられる溝跡、15世紀後半の井戸跡が検出された。第8次、第26次からの集落の広がりがわかる。							

水戸市埋蔵文化財調査報告第114集

台 渡 里 21

市道常磐21号線狭あい道路整備及び公共下水道工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第179次)

令和元(2019)年9月25日印刷

令和元(2019)年9月30日発行

編集 株式会社 地域文化財研究所

発行 水戸市教育委員会

株式会社 地域文化財研究所

印刷 株式会社 正文社
